

# マルコポロから

寺田寅彦

青空文庫



マルコポロの名は二十年前に中学校の歴史で教わって以来の馴染<sup>じみ</sup>染ではあったが、その名高い「紀行」を自分で読んだのはつい近頃の事である。読んでみるとやはり面白い。尤も書いてある記事<sup>もつと</sup>のあまり当てにならないという証拠は自分の狭い知識の範囲内からでも容易に列挙されるくらいであるが、事実という事は別問題として、単に昔の人の頭に描かれた観念として見るだけでも色々の意味で面白い事が沢山にある。

始めのうちはただ読みつ放しにしていたが、あまり面白いから途中からは時々手帳へ覚え書きに書き止めておいた。その備忘録の中から少しばかりの閑談の種を拾い出してここに紹介してみよ

うと思う。以下に挙げてある頁数は、エヴェリーマンス・ライブ  
ラリーの中のこの書物の頁数である。

## 一

二四八頁にこんな話がある。

カラザンという土地には奇妙な風習があつた。異郷から来た旅  
人が宿泊した時に、その人が風采も立派で勇気があつて優れた人  
物だと思つと、夜中に不意を襲つて暗殺してしまう。暗殺の目的  
は金や持物ではなくて、その旅人の有<sup>も</sup>つている技能や智慧や勇気  
が魂<sup>こんぱく</sup>魄と一緒に永久にその家に止まつて、そのおかげでその家

が栄えるようにという希望からだという事である。

これはずいぶん思い切つて虫の好過ぎる話である。

しかしよく考えてみると今の世でも多少これに似た事実がないでもない。例えば有為の青年を金や権勢や義理合やとつて抑えて本人のあまり気のすすまぬ金持の養子にしたり、あるいはあまり適当でない地位に縛り付けたりする事があるとすれば、これはいくらかカラザン人の遣り口やくちに共通なところがありはしまいか。

この悪習は忽クビライ必烈が嚴禁してやつと止やまつたとある。

この地方の人は始終毒を携帯して歩いてゐる。もし何か自分の悪事が見付かつて罰せられそうになると、大急ぎでその毒を仰いで自決をしようとする。これは存外見上げたものだと思われる。

ところが困った事にはそういう罪人をつかまえる為政者の方でもちやんとそれを承知しているから、あらかじめ犬の糞ふんを用意しておいて、すぐにそれを食わせ、そうしてすつかり毒を吐き出させてしまう。これではせつかくの毒も何の役にも立たなくて、結局犬の糞を食わされるだけが余計な事になる訳である。それにもかかわらずこのような事が繰り返されていたとすれば、犬の糞の効力の及ばない場合が相当に多かつたかもしれない。

これと同じ章に足を有もった蛇へびの記載が出ている。多分鱐わにの事だろうが、その説明がかなり面白いものである。

二四八頁にはカルダンダンという地方の風俗が述べてある。その中に、この地方の人は男女ともに黄金の薄い板を歯にかぶせて飾りにするとある。

この金の板の着せ方がよく分らないのであるが、とにかく現代の吾等の同胞の中にも健全な歯に黄金の板をかぶせて装飾としている人がかなり多数にある。

### 三

三二八頁にある日<sup>ジパング</sup>本に関する記事の中にこんな事がある。

この国の人に、何故そんな色々な形の神像を作るかと聞くと、これは先祖からのしきたりだと答えた。吾々に先立つた人がこういう風にして吾々に残した。それで吾々もこうして子孫に伝えるのだと云つたとある。

その話のすぐ下には、日本人の間に食人の風俗があるように書いてあるくらいだから、上の話も当てにはならない。しかしオリジナリテイを尊ばない国民性のようなのが上の話の中に表われているのは不思議である。

#### 四

三三九頁を見ると、

フェレチ王国の人々は朝起きた時に一番先に眼に触れたものを、その一日中崇拜するという事が書いてある。

新輸入の思想の初物を崇拜する現代の多数の人達とこの昔の王国の人とどこか似たところがあるような気がする。こういう風にして行けば頭がいつでも新鮮で、沈ちんでん殿かびしたり黴かびが生えたりする心配がなくていいかもしれないが、ただ少し忙し過ぎて困るような気もする。

これとは関係はないが、次の頁の脚註に、中世の博物学書に記述されたウニコール捕獲法というのが書いてある。純潔な処女をこの一角の怪獣の棲家すみかへ送り込むと、ウニコールがすっかり大人

しくなつて処女の胸に頭をすりつけて来る。そこを獵師がつかまえるのだという。相手がウニコールであるとは云いながら甚だ罪の深い仕業であると云わなければならない。

## 五

三四三頁にはこんな事がある。

スマトラのドラゴイア人の中で病人が出来ると、その部落の魔法使いを呼んで来て、その病気が治るか治らないかを占うらなわせる。

もし不治と云えばその病人の口を蒸むして殺してしまう。そして親類中が寄つてその死体を料理して御馳走になる云々。

役人や会社銀行員があるただ一人の長上から無能と宣言されただけで首をきられる。するとその下の地位にいる同僚達は順繰りに昇進してみんな余沢よたくに霑うるおうというような事があるとすると、それはいくらかはこのドラゴイアンの話に似ている。

## 六

三四四頁には尻尾しっぽのある人間の事が出ている。犬の尻尾くらいの大きさだが毛が生えていないとある。譬喩ひゆてき的には今でも大概の人間がみんな尻尾をぶら下げて歩いている。これは誰も知る通りである。

三五八頁には右の手を清浄な事に使い、左の手を汚けがれに使う種族の事がある。

これもある意味では世界中の文明人が今現にやっている習俗と同じ事である。

三五九頁にはこんな事がある。

債務者が負債を払わないで色々な口実を設けて始末のわるい場合がある。そういう場合に債権者は債務者の不意を襲うてその身辺に円を画えがく。すると後者はその債務を果たすまでその円以外に踏み出す事が出来ない。もし出れば死刑に処せられる。

こういう法律は今日では賛成者が少なそうに思われる。債務者の方が多数だから。

## 七

三七二頁には次のような話がある。

ある宗派の修道者が、人から、何故死体を火葬にするかという理由を聞かれた時にこう答えた。死骸をそのままにしておけば蛆うじがわく。然るに蛆が食うだけ食ってしまったておしまいとその食物が尽きるとそれらの蛆がみんな死んでしまわなければならない。

これは甚だ殺せつしょう生しょうであるからいけない。

同じような立場から云うと、基礎の怪しい会社などを始めから火葬にしないでおいたためにおしまいにも多数の株主に破産をさせ

るような事になる。これも殺生な事であると云わなければならぬ事になる。

こんな話の種を拾い出せばまだまだ面白いのがいくらでも出て来る。

あまりあてにならないような古い昔の異郷の奇習の物語が一々現代の吾々の生活にかすかながらある反響のようなものを伝えるのが不思議と云えば不思議でもある。「天が下あめに新したしいものはない」というのはこういう事を指しているのかもしれない。

もう少しよく搜したら貴重な未来の新思想の種子がこの忘れられた古い書物の中からいくらかも拾い出せそうな気がする。

(大正十一年四月『解放』)





# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第七卷」 岩波書店

1997（平成9）年6月5日発行

入力：Nana ohbe

校正：noriko saito

2004年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# マルコポーロから

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>